

植民地期をどう見るか

鄭 在貞 ソウル市立大学 名誉教授

韓日の歴史問題における植民地期

なぜ植民地期を議論するのか

今回の主題は「植民地期をどうみるか」です。歴史学の議論だけではなく、植民地期が韓国の社会でどのように議論され、歴史教育においてどのように反映されたかという話も含めてご説明したいと思います。

なぜ植民地期を語るのか。この期間は、韓国ではいわゆる近現代史に当てはまる時期です。およその場合、近代史は1860年代から1945年の植民地からの解放までの70年くらいを指します。そして解放後の70年くらいを現代史と言います。その近代史のなかで1910年を境に、その前の時期を「国を開いた」とか「港を開いた」という意味で「開港期」と呼びます。その後の35年を「植民地期」、また韓国の教科書では「日帝強占期（イルチェカンジョムギ）」というような呼び方をすることもあります。

このようにしてみると、植民地期は韓国の近現代史を理解するために欠かせない非常に重要な時期です。また、今の朝鮮半島は北と南に分かれており、「分断」という言葉を使いますが、その分断の歴史においても植民地期は非常に重要です。なぜかというと、今韓国と北朝鮮がいわゆるその正当性を争い、体制を競争し、厳然たる対立関係にあるため、たびたび歴史をもって自国の正当性を主張するからです。それ以外にも、今の韓国社会を左派・右派と分けると、互いの歴史観も非常に違いますし、争いがあります。そのため「植民地期をどう見るか」は、韓国の近現代史やその後の南北の分断の歴史に非常に重要な関わりがあるのです。だからこそ、植民地期を議論すべきではないかと考えています。

韓日関係の歴史を見るうえでも、35年で短い時期ではありますが、植民地期をどう見るかによって韓日関係の全体の歴史への理解が変わります。たとえば、私は以前『ソウルと京都の一

万年 京都を通して見た韓日関係史』(乙酉文化、2016)という、韓日関係を1万年の長いスパンから見る本を出版しましたが、文献から見ても少なくとも2千年以上の長い深い関係があります。その長い歴史のなかで植民地期をどう見るかということも意味がある問いです。たとえば、日本の古代文化・古代国家を設立するうえで、いわゆる渡来人の役割は非常に重要だったように、今の韓国の近現代史を語るうえで日本との関わりが非常に重要なのです。このように、長い歴史の視点から植民地期をどう見るかということは重要な課題だと思っています。それによって植民地期を見る立場や視点も異なるからです。

加えて、近代文明史・世界史のなかでこの時期をどう見るかということも重要です。近代文明では、帝国主義と植民地主義をもつ要素があります。その近代に韓国は日本の植民地になりました。「世界史のなかで韓国の植民地期は何だったのか」ということも非常に重要な問題です。ある種、植民地期についてその普遍性・特殊性などを把握して世界史を語る、世界史のなかから韓国の植民地期を語るということも必要ではないかと思っています。特に韓国の場合は、植民地期に形成された近代ナショナリズムが強いため、抵抗的ナショナリズムなどと呼ぶ人もいます。そのようなことまでを視野に入れると、植民地期は非常に重要な意味をもつ時期だと私は思っています。

私の意見を表した主な論著

今回ご説明する主題について、私が今まで著したものをご紹介します。90年代半ばから植民地期をどう見るかについて、日本のさまざまな雑誌や書籍などで発信してきました。時間があればこれらの文献(表1)に目を通していただければ、今回私がご説明する内容についてわかることになるでしょう。

特に、2022年に日本で出版した『主題と争点で読む20世紀日韓関係史』(拓殖書房新社、2022年)には、ただ植民地期を見るだけではなく、現代の日韓関係のなかで植民地期をどうみるかについてもはっきり書いていますので、参考になればと思っています。

韓国で出版した文献(表2)は、より学術的かつ論文のような内容で、「誰が、いつ、何のためにこんなことを言っていたのか」について、背景や人名も添えて随分書いています。そのような点まで併せてご参考にしていただければ、今韓国で植民地期を語ることについての全体像とその流れがより理解できるでしょう。

表 1 私の意見を表した論書（日本語）

1	『新しい韓国近現代史』 桐書房、1993 年。
2	「植民地時代をどうみるか?—韓国近現代史観の相剋」 『世界』 606 号、1995 年 3 月。
3	「韓国的一种(「国定」)教科書はいま」 『歴史評論』 2002 年 2 月。
4	「日本統治下の朝鮮の社会と経済をどうみるか—「開発論」と『収奪論』を越えて」 『世界の日本研究 2002—日本統治下の朝鮮：研究の現状と課題』 国際日本研究センター、2003 年。
5	『増補版 韓国と日本—歴史教育の思想』 すずさわ書店、2005 年。
6	『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道』 明石書店、2008 年。
7	「日本と韓国の歴史教科書に描かれた近代の肖像—'15 年戦争'と'植民地朝鮮」 『第 2 期日韓歴史共同研究報告書』 日韓歴史共同研究委員、2010 年。 < https://www.jkcf.or.jp/projects/2010/17283/ >
8	「東アジアにおける韓日地関係と歴史和解」 『学校教育研究』 27 号、2012 年 7 月。
9	『日韓<歴史対立>と<歴史対話>：「歴史認識問題」和解の道を考える』 新泉社、2015 年。
10	『主題と争点で読む 20 世紀日韓関係史』 拓殖書房新社、2022 年。

表 2 私の意見を表した論書（韓国語）

1	「식민지공업화와 한국의 경제발전 [植民地工業化と韓国の経済発展]」 『일본의 본질을 다시 묻는다 [日本の本質を再び問う]』 한길사 [ハンギル社]、1996 年。
2	「일본자본의 침투와 경제구조의 변화 [日本資本の浸透と経済構造の変化]」 『한국역사입문 ③ 근대현대 편 [韓国歴史入門 ③近代現代 編]』 한국역사연구회 [韓国歴史研究会]、1996 年。
3	『일본의 논리—전환기의 역사교육과 한국 인식 [日本の論理—轉換期の歴史教育韓国認識]』 현음사[玄音社]、1998 年。
4	「한국근대와 식민지 근대성론[韓国近代と植民地近代性論]」 『새로운 한국사 길잡이[新しい韓国史の道しるべ]』 (下)、한국사연구회[韓国史研究会]、2008 年。
5	「한국과 일본의 역사교과서에 그려진 근대의 肖像—'15 年전쟁'과 '식민지 조선'[日本と韓国の歴史教科書に描かれた近代の肖像—'15 年戦争'と'植民地朝鮮]」 『제 2 기 한일역사공동연구보고서[第 2 期日韓歴史共同研究報告書]』 제 6 권[第 6 卷]、한일역사공동연구위원회[韓日歴史共同研究委員会]、2010 年。
6	「역사에서 본 한일관계와 문명전환[歴史から見る日韓関係と文明轉換]」 『연동하는 동아시아 문화[連動する東アジア文化]』、동북아역사재단[東北亜歴史財団]、2016 年。
7	「현대 한일관계의 성찰과 비전[現代韓日關係の省察とビジョン]」 『조약의 프리즘을 통해 읽는 한일 역사 갈등 : 공존의 길을 모색하며[条約のプリズムを通して読む韓日歴史葛藤 : 共生の道を模索して]』、동북아역사재단[東北亜歴史財団]、2022 年。

植民地期に関する主張と議論

植民地期を論ずる主な立場

本題の「植民地期をどうみるか」についてです。まず、植民地を語る主な立場・視点は三つに分けることができると考えています。これは、もちろん論じる人によってさまざまですが、大半はこの三つの範疇に入ると思われます。

一つは伝統的な立場・視点です。「植民地収奪論」と名付けることができ、植民地支配により民族差別を受け、抑圧・統制によって朝鮮人が過酷な生活や犠牲を強いられたというものです。韓国はこの時期に内在的発展と自生的近代化が抑圧されて破壊された、または歪められたため、解放後の韓国の歴史展開において非常にマイナスの遺産を負ったことを強調します。だからこそ、日本の植民地支配の遺産から解放され、それを克服して乗り越えることこそが韓国の大きな課題だという主張です。

植民地収奪論は韓国の歴史、特に「現代史をどうみるか」という立場と深く関わっています。このような歴史観がでてきた背景には、いわゆる「植民地史観」があります。日本が明治期以後に朝鮮を侵略して支配する過程で生まれた歴史観です。これは、日本人によって作られ、植民地支配を正当化する論理としても用いられました。具体的には、韓国の歴史はもともと停滞していたというものです。「開港期の歴史を見ると、千年前の日本の平安時代のような」（そこから発展できない）、「韓国の歴史は主体性がない」「いつも他国に従う」（したがって日本が導いてやる必要がある）という主張がなされます。こうした、いわゆる植民地史観が主張されてきたため、解放後の韓国ではそれを克服するために、植民地を乗り越える歴史学が望ましいという意見が非常に強かったのです。そのことが背景となって生まれた植民地に対する認識が植民地収奪論です。この歴史観はある意味、内在的発展と自生的近代化という歴史観とも非常に親しい関係があります。

もう一つの立場・視点は「植民地近代化論」です。植民地支配により日本から持ち込まれた法律、制度、資本などが、解放後に韓国が国家を形成するために、また今の韓国を立て直すために非常に役に立っているという立場です。彼らは、植民地期には日本が膨大な統計や資料を残し、それ以外にも鉄道や港湾、道路など建設されたものをそのまま使っているうえ、法律や制度など目には見えない制度なども現在の韓国の原型となったため、植民地支配を否定するこ

とができないと主張します。韓国は近代においていわゆる「植民地近代化」を成し遂げたというものです。

このようなはっきりした言葉ではなく、他の言葉を使う場合もあります。たとえば、韓国の経済成長を歴史的な流れから把握する場合に、開港期から植民地期を経て現在の韓国までの統計を整理することや、さまざまな文化のなかに日本が残したものが活着していることを見て、植民地近代化論を唱える流れも明確にあります。そうした主張がなぜ生まれたかについては、後ほどご説明します。

最後の視点・立場は「植民地近代性論」です。これは植民地近代化論と似た部分もありますが、植民地収奪論と植民地近代化論というはっきりした対抗的な視点を乗り越えて「植民地期のありのままのことは見てみよう」という立場です。

植民地収奪論と植民地近代化論では大きな話題が好まれます。たとえば、国家や民衆、文明について論じられます。一方で植民地近代性論ではそのなかで生きている人々が日常で感じ、経験したさまざまなことに目を配って「それが持っている近代性は何か」を論じます。たとえば、制度と施設、権力と規律、生活と文化、在朝日本人と朝鮮人との関わりなど、さまざまな主体の経験を基にしてそのときに表れた近代性をどう見るか議論するのです。植民地収奪論と植民地近代化論とも、関係します。

この三つがおおよそ植民地期を見る立場です。もちろんそれ以外にも、独立運動史観から見る政治的な視点などがありますが、それらもおよそこの三つに整理できると考えています。

植民地期の性格をめぐる論争の展開

このような植民地期を論ずる研究ならびに教科書の記述、マスコミの論調などはいかなる過程で変化していったのでしょうか。

一つのきっかけは、おおよそ 1960 年代に入ってから韓国が自らの力で近現代史を研究し始めたことです。もちろんそれ以前も少しは行われていましたが、朝鮮戦争や南北の分断もあり、まともな研究ができる環境ではありませんでした。それが 1960 年に学生革命が起こって、いわゆる韓国ナショナリズムが非常に高まる流れのなかから自らの近現代史を見直すという動きが起こりました。北朝鮮でも同様のことが起こっています。その雰囲気の中で互いに植民地期を語り始めたのです。そのときに流行した見方は、当然のように植民地収奪論でした。朝鮮の停滞性と他律性を強調する植民史観を乗り越えることこそ、民族主体史観であると

いうものです。そのため、日本が侵略する以前の朝鮮後期の経済・社会変化、思想、実学の表れなどが熱心に強調されました。いわゆる資本主義萌芽論と呼ばれる、朝鮮の内在的發展を強調し、それが日本の侵略によって潰され植民地にされた結果として歪められてきたのが韓国の歴史だと主張するものです。これを乗り越えるためには帝国主義を打破する民族運動が必要だと結論づけられます。こうした歴史観がこの時期に非常に盛んに叫ばれていました。これにより植民地収奪論は定着するのです。

韓国では60年、70年代に日本と国交正常化し、日本の資本・技術をもって国を發展させるような近代プロジェクトが非常に盛んな時期であったため、日本により持ち込まれる最新のモノ、コトへの警戒感もありました。その警戒感を受けて軍人の若手将軍・朴正熙は非常にナショナリズム的な歴史観を標榜します。このような状況は20年ほど続き、植民地収奪論の主張は盛んに行われました。

80年代になると韓・日の知識人たちの予想を覆して、韓国が資本主義的な發展を続けます。多くの人々のなかには、極端な言い方をすれば「韓国はもう滅びるんだ」という見方が非常に強くあったのですが、朴正熙大統領が亡くなった後も一時的な混乱はあったものの、韓国は造船業や電子産業分野で世界の上位にのし上がるのです。その結果、「韓国の發展は目に見える」「否定できない」ため、韓国の経済成長の根幹に何があるかという議論も非常に盛んになります。

韓国の経済發展を長期的な視点から見ると、歴史學の發展にも関わります。理論または実証研究が進み、コンピュータを活用した統計の集計も進むため、これらによって「今まで見た植民地収奪論では見えない、いろいろなものが新しく見える」という視点から、植民地近代化論のような議論に収斂していきます。植民地期に日本から移植された資本主義發展の素地を受け入れ、学び、成長したことなどを多面的に見ながら、韓国の近現代と整合的に見るという議論が80年代・90年代に盛んに言われました。この議論は植民地収奪論を主張する人には非常に衝撃を与えました。

80年代・90年代に入っても主流の議論は植民地収奪論であり、植民地収奪論と少し異なる南アメリカの従属理論なども韓国で非常に盛んに議論されてはいました。今も一部の左派がそうした議論を持ち込みますが、おおよそは「いや、今の韓国で起こっている経済發展そのものを真正面から見よう」となります。この論争は今も続いていて、ただの歴史論争ではなく政治的な争いにも結びついているため、韓国では非常に困難な論争が続きました。

結果として、このような時代に近現代史を勉強し始めた人々が2000年代になると植民地収奪論や植民地近代化論にこだわらず、ある意味では乗り越えて、植民地期を世界史から少し見直していくような研究を行います。それは、若者たちが頻繁に主張していた民衆史観、つまり民衆を主題にすることや、近代を乗り越えること、新しい文化史を作ることなどで、さまざまな視点が生まれました。このため、非常に豊富な植民地期についての研究があります。たとえば、ソウルにカフェなどが盛んに開店してカフェ文化ができたことなどです。それ以外にもさまざまな視点がありますが、植民地収奪論と植民地近代化論とはやや異なる主張が2000年後半になると流行します。これは現在まで20年ほど流れが続いています。

現在でも韓国の社会では、植民地期は非常にセンシティブなテーマです。ただの歴史観に終わる話ではなく、それが政治的立場となっており、保守、進歩双方の陣営が譲らない論理にまみれています。右派と左派の激しい議論や世代間の戦いにも発展しています。今は植民地収奪論、植民地近代化論、植民地近代性論などが錯綜しながら新しい方向を模索している途中なのではないでしょうか。もちろん、これは一つの主張に収斂されるものではなく、研究者それぞれの立場によってさまざまな傾向がありますが、おおよそこのような議論が行われています。

韓国の近現代史をどのように整合的に説明するかという点は、歴史教科書の記述や解説などに表れるようになります。今の韓国社会では歴史認識に非常に多様な言い方がありますが、私はそのなかで「植民地期を生きた朝鮮人たちの主体性をどう見るか」ということが重要だと思います。彼らの営み、彼らの苦悩、彼らの日常の生活、彼らの戦いなどをどう見るかによって、この時期の歴史がさまざまな視点から見直されるのではないかと考えています。

歴史教科書における取扱い

歴史教科書の植民地期記述の特徴

このような形で研究・議論されてきたものは、教育にどのように反映されてきたのでしょうか。ここでは歴史教科書の書き方を論じます。歴史教科書などは普通の人々には関係ないと言う人もいますが、その国の歴史観の一般的な傾向を見るためには、役に立つものです。まずは、私が代表執筆者である高校の歴史教科書『韓国史』を例に挙げてご説明します。

代表執筆者といっても、もちろん我々が勝手に書くわけではありません。政府が決めた教育課程という日本の学習指導要領と同じものがあり、それに従って記載するため、政府の歴史政策とも深い関係があります。

『韓国史』での記述の比重は、開港期が33%、植民地期が16%で、合わせて49%です。現代史の16%と比較すると植民地期の35年の歴史が非常に大きな割合を占めていると言えます。ある意味、植民地期に過度な比重を置いているのではないとも言えます。

内容を見ると、独立運動が非常に重要だと位置づけられています。植民地期の記述のうち、66%が独立運動に関わるものです。そのため、植民地収奪論はある意味では独立運動の理屈付けをする役割を担っているのではないかと私は考えています。

もちろん、場合によってはこの傾向は異なります。2001年に日本で新しい中学歴史教科書が出版されて大騒ぎになりました。それに対抗して、韓国の歴史教科書は2007年くらいから収奪論を鮮明に打ち出します。一方で、韓国の高校歴史教科書では収奪論は少なくなります。

また、教科書には「収奪」「弾圧」「抹殺」などの言葉が用いられていますが、80、90年代の歴史教科書の記述よりは非常に柔らかい言い方が用いられます。これは注目すべき点でしょう。こんなことを言うと意外に思われるかもしれませんが、実際に教科書を書く側から見るとそうした傾向が見て取れます。また、記述のトーンが抑えられる一方で、植民地期に起こったさまざまな社会・生活の変化についての記述が増えました。むしろ収奪論よりもこの記述のほうが多くなったのです。植民地期についての理解が前よりも豊富になったとも言えるでしょう。しかし、この点についてはそれほど単純ではありません。この背景には韓国の政治的環境がありますが、後ほど説明します。

日本でも韓国でも、教科書に何を書くかについては研究が先行する必要があります。研究の蓄積があつてはじめてそれが教育に反映されるため、教科書と研究のあいだには10年程の時間差があると私は思っています。

韓国の教科書に収奪論が記載され始めたのは1974年の国定教科書からです。その後1980年代も記載が続きます。植民地期の社会・文化の変化などが教科書に随分反映されるようになったのは2003年前後の教科書からです。

また、日本人が韓国の教科書などを見ると「反日教育じゃないか」という印象を受けることが非常に多いようです。しかし韓国の教科書は、反日を標榜するというよりは独立運動を記載

の中心にしているため、日本との戦いについて言及せざるを得ないのです。それが反日に繋がるといふことかもしれません。

加えて、日本にも少しその傾向はありますが、韓国の歴史教科書については左派と右派の論争もあります。韓国はこの論争が政治を動かすことも度々あるのです。教科書が論争ないし政争の対象になることもあり、ある意味でまずいことです。教科書の書き方によって人々の歴史認識そのものが変わるわけではないのに、政治が過度に反応して政権争いに使う悪い癖が韓国にはあるとはっきり言えます。

今の韓国では教科書の記述内容もそうですが、教師による指導と試験問題が教育に非常に強い影響を与えます。ご存知のとおり、韓国の歴史教育の現場を支配しようとする人々がその方向性を左右する面がある種あります。日本でも一時期はそのような状況にありましたが、すっかり変化しましたね。一方、韓国の場合は未だその傾向が非常に強いままで。彼らによって、植民地期についての歴史教育が植民地収奪論と独立運動の一本槍で行われるということもあります。

また、最近の韓国の全国統一の大学入学試験である大学修学能力試験では韓国史の試験問題が10問ほど出題されますが、2021年、2022年のものを参照すると6~7割が植民地期の歴史を試験問題にしています。これについて、私は少し過度ではないかと思えますし、韓国の抵抗的ナショナリズムが維持される要因になるのではないかと考えることもあります。

韓日の相互理解のために

韓日で植民地期の相互理解は可能なのか

植民地期をどう見るかという私の話を基に、これから韓国と日本のあいだで植民地期を相互に理解することが可能なのかというお話をしたと思います。私は韓日の歴史全体について、一時期に焦点を当てて強調しすぎることには無理があるのではないかと考えます。韓国と日本のあいだには、先ほど話したように2,000年以上の長く深い交流の歴史があります。その歴史から植民地期をどう見るか考えることが必要でしょう。さらに、韓国と日本の文明の形成から見て、植民地期がどのような意味を持っていたかについても考えなければならないと思っています。

近代に日本側がまず西洋文明を消化して植民地支配という暴力を伴うようなプロセスをもってそれを朝鮮に植え付けたという面もあるでしょう。また、その過程で韓国が主体的に西洋文明を自分のものとして身につけて成長したという面もあるでしょう。それらを全体的に一つの文明転換という視点から見て、この時期のもつ意味を検討することも可能なのです。

遡れば、古代日本では文明や国家を建設するうえで、渡来人によって大陸の進んでいる国家の制度や文明などが紹介され、日本はそれを基にして自分の国家文明を作り直すこともありました。こうした歴史のなかで頻繁にある事柄から植民地期を見直すということもできるのではないのでしょうか。私はこのような視点であれば韓国と日本で互いに対話ができるだろうと思っています。

また、植民地期に起こった出来事の多くには、複合的・重層的な要素があります。収奪・開発、弾圧・抵抗、独立・同化など二項対立のようなことばかりではなく、それらに含まれないことも多くあります。それに対するアプローチも多様化していることも視野に入れると、さらに豊富な歴史観が生まれるでしょう。そのようなことが植民地近代性論の歴史研究の流れに反映されていると私は思っています。

さらに、国際情勢と国際関係も視野に入れて、世界及び東北アジアのなかでの韓日関係や、植民地期をどう見るかという視点も重要だと思っています。日本の歴史教科書を参照すると、近代史には国際情勢・国際関係の記載が多く入っており、これは当然のことと言えます。日本はその当時、帝国主義の仲間入りをして世界史のなかで活躍するからです。一方で、韓国の歴史教科書においては、まだ世界の大勢や東アジア全体から植民地支配を見るという視点では少し弱い面があるのです。加えて、植民地期を語ることについては、現在起きているさまざまな歴史問題・歴史認識をめぐる韓日の葛藤にも関わります。ご存じのとおり、「徴用」をめぐる問題や慰安婦問題をはじめとした問題や、それ以外の歴史認識、植民地支配への貢献や収奪などの言葉などです。これらの歴史問題を考えるうえで、植民地期はやはり重要な時期です。その植民地期をできる限り正確に、事実に基づいて解釈することは韓日の互いのためになりますし、両国が抱えている歴史問題をなんとか乗り越える際にも役立つと思うので、私は省察的な観点から植民地期を見直すことが必要ではないかと思っています。

交流と協力の事実も紹介しようという視点は、現在の韓国と日本の歴史教育ではあまり取り入れられていません。特に現代史においてはその傾向があります。現代史のなかでは、韓国と日本の交流と協力が非常に役立った部分もあります。

植民地期については、たとえば最近の韓国の歴史教科書に石川啄木の歌や浅川巧、布施辰治の話が掲載される動きがあります。やはりこの時期も韓国人と日本人の間で交流があったという話題については、非常に難しい話ではありますが最近では研究が行われて本も出版されており、重要な点だと思います。これは開港期にも言え、今後記載を増やすべきことだと思います。

最近では韓国国内では一部から「もう日本は駄目になった」「20年、30年の停滞によって韓国に乗り越えられた」という声があがっています。これは大げさで、ある意味ではもう一つの歴史の歪曲になるのかもしれませんが、しかし、韓国が日本と競争し合う立場になったことは事実です。私はある本で「垂直的分業体制」という言葉を使いましたが、これまでは上下関係のような立場でしたが、上下垂直的な関係から、対等な立場で互いに競争し合い依存しながら相互の発展を目指すようなレベルになったのです。そのような考えのうえで植民地期を見直すことができれば、植民地期に主体性を持って成長した朝鮮人や、日本人と競争し合った朝鮮人もいるという事実を探ることができるのではないかと思います。これらのことから、韓日関係を展望する際にも同様の視点を重視すべきではないでしょうか。

植民地期を見る際には、日本から見れば日本が主体であり主語になります。日本政府や日本企業、日本の銀行が何をどうしたといった記述になります。一方韓国から見れば、やはり植民地期における日本人は異民族であるため、韓国人の私からすれば「その時期を生きた朝鮮人が主語となる歴史をどう書くべきか」が焦点になります。植民地期に生きた朝鮮人の自主性・主体性に着目して当時の歴史を見直すこと、可能であれば韓国の近現代史を整合的に組み立てることを重視する必要があります。こうした視点を活かすことが重要だと自覚すれば、植民地収奪論や植民地近代化論、植民地近代性論についての議論も豊富になり、それらを整合してある種の新しい歴史像を作ることもできるのではないかと私は考えています。

チョン ジェジョン

韓国・忠清南道唐津出身。ソウル大学校師範大学歴史教育科卒業。東京大学大学院（修士）。ソウル大学校大学院国史学科（博士）を経て、ソウル市立大学校人文大学教授（国史学科）。主な著書に、『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道 1892-1945』明石書店、2008年（三橋広夫訳）、『교토에서 본 韓日通史（日本から見た韓日通史）』효형출판、2007年（韓国語）。主な翻訳に、『일본의 문화내셔널리즘』도서출판 소화、2008年〔原本：鈴木貞美『日本の文化ナショナルリズム』〕

ム』、平凡社、2005年）、訳『러일전쟁의 세기』 도서출판
소화、2010年〔原本：山室信一『日露戦争の世紀－連鎖視点から見る日本と
世界』岩波書店、2007年〕。